

望ましい観光地形成論

佐々木 宏 茂*

ここでは観光が単に需要を追いかけるだけでなく、潜在的な需要を喚起して、もって観光基本法に揺られている如く国民の健康増進、福祉、レクリエーション、地域振興を有効ならしめるための、べき論的観光論を21世紀に向けて考察し、「べき論的観光地形成」を論ずることにある。

観光の定義は古くからいわれているが、この言葉のもつ意味は時代の変化のなかで意味内容も変化してきている。研究対象とか観光の決定要因などについてもさまざまに論じられてきたが、21世紀を迎えた現今、またこの定義についても再度検討することにより観光のあるべき姿を論じて未来を予測して見たいと思う。

1. 観光 (Tourism) に含まれる要素と望まれる概念

○ 変化を余儀なくされる「観光」という言葉の意味内容

観光の定義や概念は時代の変化のなかで意味内容ないしは概念規定が変化してきている。

したがって本論の「べき論的観光」とした場合の観光の意味をパラダイムのなかで考察して現代に至る過程を振り返ってみるとも論題に応える前提として意義があろう。

観光という言葉は [TOURISM] の翻訳である。観光は漢語であり「光」は字の形態からみて文字どおり太陽の光を表現していると思われる。中国の雄大な景色に太陽の光が天より差し出る元に国の景色を見て観光と言ったのではなかろうか。後年国の光を見ると意味あいとその光を国の制度文化を観る意味になったと解釈して良かろうと思われる。我が国では観光という言葉は特に明治以降に多く用いられている。それはむしろ観て視察して比較することが初期の段階であり第2次大戦以降観光旅行と言う名のもとに楽しみのための物見遊山的に用いられてきた。したがって現代的解釈のなかで観光という言葉は学ぶ、遊ぶ、楽しむといった、泊まる、遊ぶ、食べる、の中で全てを解釈しがちであるが、21世紀を迎える現今、観光という意味内容はこうした意味におくのではなく時代の変化の中で21世紀を迎えて新しい感覚のもとでとらえて、望ましい観光地を含めて考える時代となったといえる。ここで視点を別の観点から考察して観光の光を文字どおり太陽エネルギーを元にして考察するならば望ましい観光ないし観光地形成を考える糸口を得ることになるであろう。つまり全ての森羅万象は太陽エネルギーに還元出来るという物理法則に従うとするならば、観光の現象も人間の意志を介在させてこのエネルギーを用いていることになる。こうした視点からみた場合、

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

観光問題を後段で論及する持続ある観光を考察する際に論及しやすい。

○ 「Tourism=ツーリズム」をそのまま日本語に用いる方が妥当

マーケティングという言葉がそのまま用いられる如くツーリズムも同様に用いられるべきである。

観光が研究対象となったのは、塩田正志の観光学説（新観光経済学「除野信道編著第三章」平成10年12月16日）の一部を参照してべき論的コメントを付け加えてみることにする。「1929年にイタリアのマリオッティが観光経済に関わる部分に言及して観光を研究対象としている。彼は観光の下部構造すなわち観光を成立せしめる基盤構造と観光の滞在ならしめる快適さという施設の上部構造と言う見方を披瀝して観光はこれらが調和の取れた構造が観光政策に生かされるべきである」との論を展開した。今から70年前の理論である。ここにはべき論的観光形成のありかたが具体的に表現されて学究の対象となった最初の論といえよう。「1931年にドイツのポールマンは観光の決定要因を分析して一般的決定要因としては観光地あるいは地方の自然状態、国の経済的、政治的要因（国民所得、個人所得、通貨状態、貿易）をあげて、特殊的決定要因としては観光地および観光地方の特殊な催しと施設、観光宣伝、行政、観光事業組織および、これに類する方策を幅広く上げて（旅券、査証の簡素化）、（交通網・案内所の整備）季節的決定要因、その他（流行）を上げて当時の観光政策を重視して政治政策、文化政策、社会政策経営政策、商業政策、交通政策を論じている。」いわば政策としての観光を総合的にみる見解がなされている。

しかしながらこれら古典的観光学の望ましい観光を要素として取り上げるならば観光が未だ特権階級に限られた時代である観光による経済収入とそれがための観光政策に帰結するであろう。

フンツイカーは1972年に「観光学とその応用」を著わして観光学は「理論的基礎と一方では観光政策、他方では経営経済的な部分を持つ固有な科学的な領域とした」つまり純粋理論としての観光学の上に観光政策（国、公共団体）と観光経営政策（企業）と言う2つの上部構造を講義の観光学が存在するとした。1942年フンツイカーは「観光 (tuorism) とは外来者の旅行と、主要な定住をしない、また、それによって原則として、営利活動に結びつかないような滞在から生ずる諸関係現象の総体的関係」であるとした。

ここにいたって観光 (tourism) 概念は現代的な解釈を得たといえよう。これに付け加えるに世界観光機構(WTO)では、ツーリズムすくなくとも日常圏から100マイル離れたところで一泊以上して1年以内に日常圏に帰ってくることと定義付けている。Tourism とあわせてその間に生起する現象を幅広くとらえればツーリズムが現代においては観光レクリエーションを含みながら人々の異日常圏における生活環境を心の豊かさや安全、清潔を伴いながら受け入れ社会と観光者、観光地の調和のある形で希求する意味になるであろう。近年に至り観光レクリエーションと概念を含めて観光を定義付ける傾向があり、これがリゾートという意識を生じさせて観光と地域活性化を関連付ける重要なありかたを提起してきている。

我が国の内閣政策審議会では「およそ観光とは自己の自由時間のなかで観賞、知識、体験、活動、

休養。参加精神の鼓舞など、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足させるための行為（レクリエーション）のうち日常生活圏を離れて、異なった自然、文化などの環境のもとで行なおうとする一連の行動を言う」として観光レクリエーションの概念を強調している。

2. 産業としての観光と地域構造型としての観光

観光を産業として捕らえる場合の視点として観光商品の構成をどのようにとらえ、それが生産されるプロセスが問われることになるであろう。観光商品の構成は旅行業が観光の仕入れとすることばをつかい主催旅行としての観光企画を売り出す立場からとらえてみることにする。この場合の商品の包含するものは幅が広い、アクセス交通、域内交通、宿泊施設、観光資源を観る、参加するなどを全て含めてその利便性を商品とするわけである。こうした商品は地域振興にかかわる観光の行政、民間観光事業、地域社会の文化、等を特異な商品として流通させる。

観光商品形成 → 流通組織（旅行業が大きな役割を果たすが旅行業のみとはかぎらない） → 消費者 → マーケティングによる再生産 → 観光商品形成と循環的に繰り返して観光商品が形成される。これら商品の消費者と生産者のみを考えることが望ましい観光地となるかどうかが課題となる。この商品流通が盛んになることにより資本主義的市場経済が過度に極大化された流通システムはしばしば資本のためにのみ流通してトータルな地域社会とか調和のある観光地形成を欠くことになる場合もある。

観光が地域の経済に寄与し地域の活性化を促すことは望ましいことである。しかし何をもって地域の活性化と判断するかその根本が問われなければならない。観光の商品は総合的要素から成り立っている故、こうした問題は単純ではないが、経済成果という概念の定義に行きあたる。たとえばある地域に大きなホテルができる。観光客が増加してホテルの収入があがる。ホテルの収入の取り分は平均的には総売上の30%位といわれる。70%は地域社会に税収、雇用、地域の納入業者、等の取り分として配分される。しかし観光地もバトラー提唱するところの年月の経過と共に生成発展、衰退の傾向をたどる。望ましい観光地としては出来る限り長い年月の間、継続的に経営できることが望ましいことは経営学者であるピータードラッカーが優れた経営者は経営を継続させることであると言ったことと相通ずる。観光を商品として扱うことは観光地を売り出すことに効果はあるがここに危険な矛盾を包含していることにも気がつかなければならない。資本主義における商品販売は出来る限り経済の効用性を求めることである。観光は公共財的な資源と地域社会、自然資源といったものを含めるのでその商品構成は単純ではない。その扱いは、特に21世紀に向けたあり方として一方が利得あれば一方が損害をこうむるというような単に競争関係で成り立つ商品でないことに認識がなされなければ、継続的な望ましい観光地形成は困難になるであろう。観光は総合的な協力関係を如何に形成するかが問われることになる。たとえば近頃道の駅が好評である。道の駅は言わばマイカー旅行者にとってサービスエリアに匹敵するものであるが、地域社会や地方自治体のネットワークによって成立する観光施設である。観光地形成は観光の商品構成とその販売にのみ目を奪

われると21世紀に向けたトータルな継続的な観光地の経営を保つことはできない。

○ 地域の生産様式、地域の文化や生活が結果としての観光地形成となることが望ましい

群馬県内の甘楽町、倉淵村のような望ましい観光地が形成されている。こうした成功した観光地形成に共通してみられる有り方はどこにあるのであろうか。観光地形成は極端に言えば冒頭に上げた如く観光の光を太陽の光エネルギーの根源とみなして、自然、や文明、文化が形成される。但しこれらを観光資源として活用することは人間の意志が介在して始めて可能である。太陽の光、水、緑のあるところは人類の知恵と意志により村落、都市文明、あるいは文化を形成してきたのである。観光地形成のために、あるいは、地域振興にとって根本的に求められるのは地域住民の優れたリーダーシップの基に地域住民の協調性が要請される。つまり動機づけられた人間の意思がまず最初に求められる。

ここに観光振興にたずさわる人材の問題があり人材育成とか人材に資本をかける発想も看過できない。観光は脚光を浴び地域振興の有力な手段とされるが、その意志形成のために時代にふさわしい地域社会の住民が意欲を持って生活できる環境をどのように形成するかが問われなければならない。こうした意識は地域の生産様式、地域の文化、生活、特性を認識した上で発揮された場合望ましい観光地を形成する。観光に限定した意志のあらわれ方は観光計画と言うことになる。地域振興と観光を配慮する場合に成功したところは優れた人材が観光を地域に合致した形で指導性を発揮している。その意思の現れ方は現今どの方向性に望ましいありかたがあるかが問われなければならない。

観光客は観光業者からサービスを購入すると言われ方をするがそのみではない。

地域全体の観光地事業とサービス提供をする便益機能と見る以外に次の点を上げることができ、これらが計画的に整備されて提供されなければならない。

1. 地域の自然環境
2. 地域の社会や文化
3. 地域住民との交流
4. 地域内交通や園地など観光の基盤整備 等

観光地域を地域の舞台とすれば二つの見方がある。

通常、観光といえば平たく言うと観光地域は計画にもとづいたテーマ性を持った地域の博物観的舞台であったり、伝統芸能やイベントが実際に演じられている舞台であったりする側面があるが近年にいたって、この舞台に観光客が参加する側面が多くなったことである。観光レクリエーション地域と称されたり、リゾート観光地といわれる場合、観光客が舞台に参加する側面が求められる。望ましい観光地とはこの両方の舞台が存在していることが現代の観光である。「観光・レクリエーション」の概念を基盤として地域振興も考慮する時代となったと言えよう。

3. 観光地形成とホスピタリティー

ホスピタリティーという言葉は英語であるが最近この言葉は公的な表現として登場してきている。

英語ではあるがその語源的な意味をたどれば英語圏のみでなく諸国の文化形態にみられる。

英語が世界共通語である故、[hospitality] が日本語化されて公用語として使用されてきているので言葉として市民権を得たと言えよう。諸国のホスピタリティーの現れ方はそれぞれ異なるが共通しているのは地域社会をを構成していく上での相互の共生や互惠のことであり、その根本理念はユニバーサルな価値概念を含むものである。その共通した理念を英語で表現することになるがその現れ方は文化形態によって異なる。日本的なホスピタリティーは例えば茶の湯の精神にその現れ方がみえる。ベドイン族のお茶のホスピタリティーは天幕を四方に開放してお茶を振る舞いそれが客との会話のなかに近況の情報を得るとのことであるが、両者にみられる共通点は一方は一期一会、一方は砂漠の民が茶を通してもてなし客人との対話による信頼感の醸成にある。共通点は相互の肯定にある。かつて我が国が1987年にリゾート法を施行して概ね失敗している。フランスはリゾートの開発にかなり成功している。その違いはこの総合的な見地からみたホスピタリティーの違いにあったと見てよいであろう。リゾート法の本質は地域活性化を目的とした内需拡大であり推奨されるべきものであった。しかし今となれば万人が認める土地値上がりによる開発収入に傾いて未だにその後遺症から完全に脱しているとはいえない。フランスの場合は政府が土地値上がりの統制、ワークシェアリングによるバカンスの奨励、など総合的なホスピタリティーの政策があったがゆえの成功といえよう。以上は政策面から見たホスピタリティーであるが微視的視野からみた場合のホスピタリティーは地中海クラブのGO（ゼントルオーガナイザー略してジーオー）があげられるであろう。これはいわばリゾートライフを客がエンジョイするために配置されたパートナーとしてのヘルパーであり単なるサービスではない。

世界のチェーン展開をはかるバカンス村と称するリゾート施設を普及させている地中海クラブのホスピタリティーの特徴はこのGOに象徴される。サービスする側される側の垣根をはらって客と一体となってスポーツを楽しみ、バーで会話を楽しむ。これがフランス人の創造したホスピタリティーのあり方である。

また角度を別にしてホスピタリティーを見るならば、ヨーロッパのホテルのランク付けは従業員の厚生施設のチェックもランク付けの際チェック項目のなかにいれている。サービスされる側する側の相互の互惠と自他の肯定をこうした点にまで浸透させているのもホスピタリティーの範疇にいられてよいであろう。

これを現代的に観光全般に解釈するならばホスピタリティーを単なるもてなしと解釈するのではなく、観光の成り立ちの基礎となるホストとゲストの関係における相互互惠の構成の仕組みと解釈出来るであろう。したがって観光地形成の計画そのものはホスピタリティーの提供をどのように構成するかが問われる。観光客と受入社会、観光地の3者の関係が共生できる仕組みが求められる。

地域の振興は観光のみではないが、地域振興を配慮したばあいの観光とは地域の総合的なホスピタリティーの形成であると言えよう。

4. 光の欲求段階と観光地形成

マズローの欲求段階はよく知られているが、ロバートクリスティー4は、これを観光客の行動欲求段階に当ては説明している。基本的な欲求は生理的欲求段階——安全欲求段階——所属欲求段階——尊敬欲求——自己実現段階。となっている。この段階にしたがった欲求」に応じた観光者の欲求をロバートクリスティーは次のように挙げている。それに応じた観光地の形成を羅列する。

進退的欲求欲——逃避、リラックス、緊張の緩和、日光欲(自然や静かな温泉地や海辺でリラックスする。)

安 全 欲 求——健康回復、レクリエーション、将来の健康維持(クワハウス、タラソセラピー、健康維持のための医療施設を伴った観光地)

所 属 欲 求——家族の親和、人間関係の絆をたかめる親睦、仲間意識の強化、社会的絆の確認、個人的な血縁ルーツ、異国情緒にひたる、家族への愛情の証(レクリエーション施設を伴うリゾート施設、活動、参加型)

尊 敬 欲 求——達成感の確認(ステイタスの確認) 自己の地位確認、自我の認識

自 己 実 現——自己の性格への正しい評価と自己信頼、自己の発見、自身の内部欲求にたいしての満足、文化に対する理解、教育に対する理解、外国の地域にたいする興味と理解、美に対する理解(観光地の文化、芸術、自然美、人間同士の感動的ふれあい)

こうした欲求段階に応じた観光地形成は観光地のおかれた条件の元にどこに重点を置くか、あるいは、複数にそれぞれを満足させることができるかを検討する必要がある。

望ましいことはこれらを満足させる地域的な広がりの中で総合的に観光客が選択できる周遊性の観光地形成が望ましいと言える。

5. 風土と特性を生かした観光地の形成

地域の気候風土の地域特性は観光の光(人間の意志の介在がその地域の文化を作り、自然の気候風土が地域の自然の特性)をもとに形成すべきである。観光は新しい体験とか異日常性のうえに成立する故に、その地域の有する地理的条件、地誌的条件を生かした観る、あるいは体験することが観光の基本的条件であり、この観ること、あるいは自然的条件と人為的計画によってつくられた施設で遊ぶこと、風土によって特徴づけられた食材をもとに提供される料理をも観光資源を形成する。したがってその地域の特徴ある自然観光資源の動物、植物、第2次環境としての人間の意志が介在した物質文明として地域の特徴のある町並みを生かし、見せる手段と方法が問われることになる。

気候風土は潜在的な観光資源を形成している。これらを顕在化して見せる、知らせる、ことが地域の観光計画となる。砂漠の宗教は一つの神の宗教を生み、湿潤地帯の宗教は汎神論を生じさせた。

マクロな地勢は山陰と山陽、南関東と北関東、東北、北海道とそれぞれ異なる。こうした地勢の特徴は微視的には隣の町、村でも異なるところがある。例えば、今年の10月19日産経新聞に「今の町が元気だ」のコラムに細野憲明記者が取材した。角田さん（46歳）東京の大学卒、東京で就職家庭の事情と病気でそのご故郷にUターン、金木町でピアノの教師をしながら、ボランティアの企画集団「ラブリー金木」を立ち上げる。

「津軽半島ぐるみイベント」に地吹雪体験ツアー（新沼憲治のヒット曲「津軽恋歌に七雪一粉雪、粒雪、綿雪、ざら目雪等、七種類の雪がありこれを見るツアーで観光客増加を図っている。旅行会社にダイレクとメールで参加を募ったところ九州や関西から反応があって昭和63年に体験者63人がその後150人、3年後に500人昨年で約1000人になっているという。

「地吹雪体験ツアー」に続いて同県中里町の間を走る津軽海峡の「ストーブ列車」目をつけて冬の間、暖房のストーブをたいて走る列車のなかでスルメを焼き、酒を振舞うことで観光化をはかり平成2年から始まったの企画は平成8年で8千人平成11年で1万2千人になったという。地吹雪もストーブ列車も津軽も土地の人にとってありふれた日常でありかつ天敵であるが九州、関西の人にとっては非日常になる。又逆のこともいえる。

地域の日常性のなかに案外観光資源がありこれを顕在化して観光化して地域振興に役立てるありかたが望ましい。かつて1987年リゾート法が制定されてより各地によく似た施設ができて金太郎アメのようだとされたことがある。これはリゾートとか真の観光に関する未成熟な段階の現象であったと言えよう。

地吹雪体験ツアーは地域興しのイベントであるが地域性の特性をいかした例である。本州最北の津軽半島の冬の厳しい条件のもとでマイナスをプラスに転化することはやはり人間の意志の介在、であり、人材で有ると言えよう。

6. 望まれる持続可能な観光地形成への試論

○ アグリツーリズムと持続可能な観光

持続可能な観光とは一つは観光のマーケットを的確にとらえて経営の継続を図る意味と、もうひとつは環境破壊を避ける意味のツーリズムを意味するものである。単に観光の生成、成長発展、消滅を避けるためにリニューアルをして持続を図ることに至上の価値をおくのではなく、地球環境を保全することがいまや、至上命令になっているので観光もこの視点を欠かすことはできない。

自然資源を基盤とした観光レクリエーションをもとに特に過疎になった滞在型観光地形成を工夫して交流人口を増やす必要がある。都市計画専門家で現在はクライガルテン、アグリツーリズムに取り組んでいる津幡修一氏は（著書「現代ヨーロッパ農村休暇事情」1994年1月出版、206ページ）で以下の如く述べている。

「東京に人口が集中して行く、さらに繁栄するというのは幻想である。少なくとも大切な家族の生活はますます厳しくなっていくでしょう。」としてミジンコ的中性化現象の説明の説明として富栄養化による中性化が異常発生して衰退する例をあげている。

「東京都のある区では家族40%、単身生活者60%モデルが支配して平均家族数は2.2人この異常な社会構造の、特異な生活論理が都市を支配し始めた。ヨーロッパではその異常さに気がつきはじめたので都市を拡散しはじめました。労働時間の効率化が支配する小都市とのバランスの中で、市民たちはそれぞれの生活を修正しはじめています。ヨーロッパの現代。田舎くらしの社会システムはそのなかで可能となっている。都市は豊かです。都市にはなんでもある。と憧れた時代が急速に衰え森は豊かです。森には何でもあります、海は豊かです、海には何でもあります。と見なおす必要があります。」

こうした観点から21世紀に向けた観光レクリエーションが推進されるべきであろう。

この背景もヨーロッパのクライガルテン（小農園参加型旅行）や、アグリツーリズム（農家宿泊滞在型旅行）の大きな要因となっている。地域交流人口増加を配慮した観光地形成と環境保全、そして持続可能な観光を考慮にいたった観光地形成が望ましい21世紀のありかたを示している。持続可能な観光の対極にある持続不可能な観光とはまさにバブル崩壊で潰え去ったリゾート法施行（1987年）後の土地神話に触発され開発収入に重点をおいた大規模経営の「ハコ」ものリゾート施設が良い例である。21世紀は観光の受入社会、観光地、観光消費者の3者の相互互惠に基づく調和ある観光の形態が求められる時代的要請に答えをださなければならなくなってきた。たとえば長崎オランダ村のテーマパークの見学スポットとして污水处理施設がある。

これによって海洋の汚染を防ぐような科学的知見と自然の保全をエントロピーの法則に基づいて配慮する相互の利点と価値を見い出すべきである。

環境アセスメントに依拠した総合的な見地に立つ観光開発が今後の開発手法として求められる。

参考文献

- 除野信道 編著 新・観光社会経済学 内外出版 1998年3月
大和ハウス工業生活研究・所多摩大学総合研究所編 レジャー産業を考える 実教 1993年 出版
特定農山村法研究会。編著 特定農産法の解説 大成出版者 1996年2月
Robert Christie Mill The Tourism System Prentice Hall 1985年
津端修一 現代ヨーロッパ農村休暇事情 はる書房 1996年7月
足羽洋保 編著 新観光学概論 ミネルバ書房 1996年5月